

# 手術を受けた消化器がん患者の退院後の QOL とその影響要因

## 3階東病棟

○ 井上真裕美 上地 美香 土居 理恵 和田 知子  
岡村まゆか 一柳 千代 麻植美佐子 有瀬 和美

### I. はじめに

当病棟では過去5年間に年間平均約125例の消化器癌の手術が行われている。手術を受けた消化器がん患者は解剖学的欠損、生理学的な機能変更が生じ、自己概念の変容を余儀なくされ、これは退院後のQOLに大きく影響を及ぼすと予測される。このため患者の退院後の生活における感じ方も変化しているものと考えられる。

看護者は退院後の生活をふまえた看護を行っているが、実際患者がその生活をどのように感じているかは把握できていないのが現状である。そこで当病棟で手術を受けた消化器がん患者が、退院後の健康状態や日常生活をどのように感じているか、どのようなことがそれらに関係しているかをQOL測定をすることで明らかにしたいと考えた。

### II. 用語の定義

私達はフィンランスとパワーズの「個人にとって重要な生活の領域に伴う満足、あるいは不満足から生じてくる安寧という感覚である」という定義をもとに、QOLを「個人の術後の健康状態や日常生活における満足、あるいは不満足から生じてくる安寧という感覚」と定義した。

### III. 研究方法

1. 調査期間：平成12年8月14日～平成12年8月30日
2. 対象：過去5年間に当科で手術を受けた消化器がん患者129名
3. 方法：アンケート用紙を対象者に郵送
4. 調査内容：QOL測定には「フィンランス・パワーズの生活満足度指標（日本語版）」を使用。（以後生活満足度指標とする。）  
患者の個人状況を知るために性別、年齢、職業、地域での役割、現在の症状についての質問用紙を作成し同封した。質問紙表は無記名とし、研究の主旨、参加の自由、個人情報秘匿の厳守を記載した。
5. 分析方法：スタットビューにてT検定・相関関係の分析を行った。

### IV. 結果

アンケートの回収数は82で、有効回答数は31であった。対象者の内訳は男性21名、女性10名、年齢は40歳から80歳で平均64歳で、疾患は食道癌、胃癌、膵臓癌、肝臓癌、胆嚢癌、結腸癌、直腸癌であった。退院からの期間は最短2ヶ月、最長4年7ヶ月であった。有職者は14名、無職者（主婦を含む）が17名、地域での役割を持っている者は16名、持っていない者は15名であった。告知を受けた者は27名、受けていない者は4名であった。現在症状の有る者は26名（消化器に関するもの14、消化器以外6）、無し

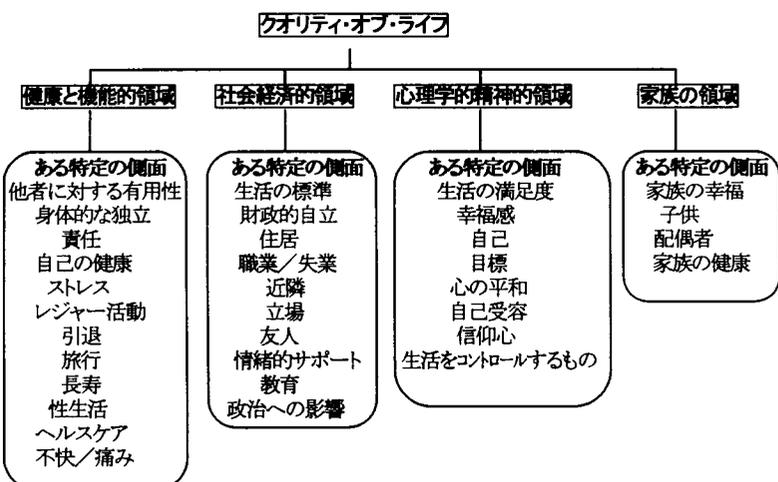


図1 QOLの全体的な構造、4つの主要領域、その領域の特定の側面の階層的関係

が5名であった。

生活満足度指標は①健康②社会経済③心理精神④家族の4つの領域で構成され(図1)、第1部では各領域における満足感を、第2部ではそれが対象者にとって重要かどうかを評価する質問形式で成り立っている。重要度が高く、かつ満足感が高いものが高得点で満足度が高いと判断し、反対に重要度が高いにもかかわらず満足感が低いものが低得点となり、満足度が低いと判断する。

QOLに影響を及ぼす要因として告知の有無、症状の有無、職業の有無、退院期間、年齢(64歳以下・65歳上で区分)、性別を考え、それらについて各領域での関連、相関関係について検定した。

4つの領域と年齢との相関関係はみられなかった。告知を受けている者の中での4つの領域における男女間、及び地域での役割の有無に有意差は認められなかった。全対象者の4つの領域における男女間の差、地域での役割による差、年齢による差、職業の有無による差にも、有意差は認められなかった。

生活満足度指標全体における平均点数に影響要因別に検討してみた。4つの領域における満足度はいずれも家族の領域が高く、次いで社会経済、心理精神、健康の順になっている。告知を受けている群が、受けていない群に比べ全体の満足度は低い結果となっている(図2)。特に健康、心理精神の満足度が低くなっている。職業の有無でみたときは、有職者において健康、心理精神の満足度が低い結果であった(図3)。男女間の差、症状の有無における満足度の差は見られていない(図4・5)。退院1年未満と1年以上では、退院1年未満の群が全体的に満足度が低くなっている(図6)。特に健康の領域における満足度の差が大きい。64歳以下の群は65歳以上の群に比べ、4つの領域の満足度が低くなっている(図7)。

## V. 考察

今回の調査では、有効回答数が少なかったため統計学上差がみられず、関連性を実証するに至らなかった。しかし、各個人の質問項目における満足度を調べてみると、退院した患者達の現在の生活に対する思いと、それに関わる影響要因を知ることができた。

赤池こずえは「外科学、麻酔科学の進歩により、これまで治療不可能と考えられていた進行癌の多くは切除可能となり、「癌」＝「死に直結する病気」というイメージは過去のものとなった。しかしながら、多くの癌患者が“余命の延長”という現代医療の恩恵を受けてきた反面、術後の通院・検査や、癌再発の恐怖、治療によ

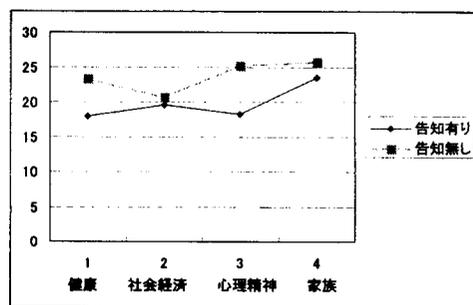


図2 告知の有無による平均値

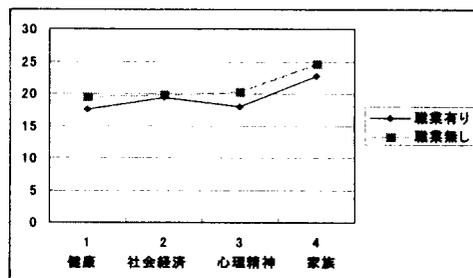


図3 職業の有無による平均値

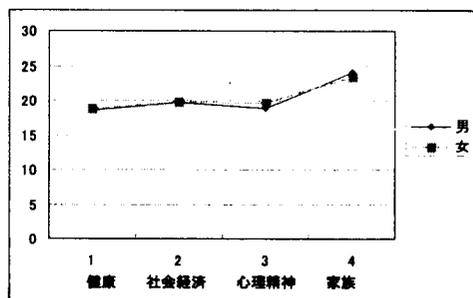


図4 性別による平均値

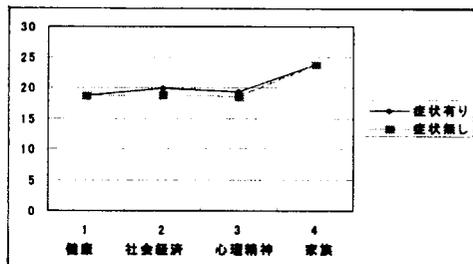


図5 症状の有無による平均値

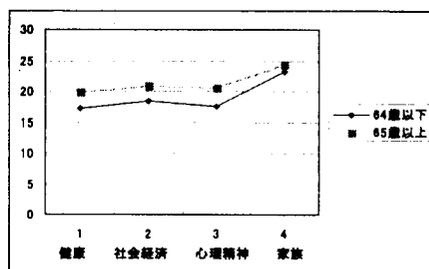


図6 年齢による平均値

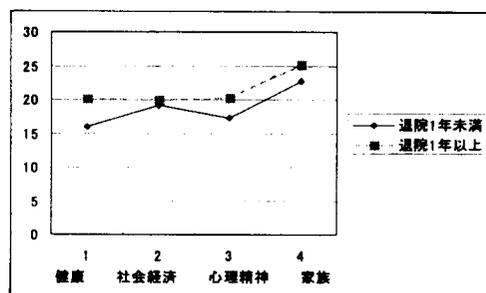


図7 退院期間による平均値

ってもたらされたさまざまな障害など、その悩みも増大し、多様化している。」<sup>1)</sup>と述べている。死因の第1位を悪性新生物が占めている中でインフォームド・コンセントが提唱され、積極的に行われはじめ、近年の癌患者を取り巻く環境がQOLに大きく関与してきていると考える。

告知を受けることにより、患者は現在の自身の価値観やすがたに不満を感じ、それは、“長生きできる可能性”や“あなたが幸福な老後、または隠居生活を送る可能性”といった、近くまたは遠い将来にも影響を与えている。このため健康、心理精神の得点が全体のQOLの総得点を引き下げる結果となった。

職業の有無は、健康と心理精神の領域のQOLに影響している。特に気力、体力、経済的自立に満足度が低い傾向にある。年齢的にみても、40歳から50歳前半の男性はその傾向が強い。一般的にこの年齢の男性は社会・家族に対する責任が大きく、経済面での担い手である。罹患、手術、継続治療により、その責任が十分果たせていないと感じているのではないかと考える。

退院後の期間は、健康及び心理精神領域での満足度に影響を与えている。術後の体の回復は6ヶ月を越える長期にわたる。手術を受けた患者は、手術によってもたらされた身体的・生理的機能の変容を受け入れ、癌再発の恐れを抱きながら、家庭・社会生活に適応するよう対処行動が必要になる。退院後1年未満の者の満足度が低いのは、これらの事が影響しているのではないかと考える。

症状の有無での満足度の差は見られていない。殆どの者が症状を抱えながらも社会生活を営み、適応しているすがたがうかがえる。我が国の有訴者率は年々増加傾向にある。反面、医療保健制度の改正に伴い在院日数の短縮がはかられ、症状を持ちながら生活をしなければならない者は、今後も減少することはないと考える。

## VI. まとめ

- ・統計上明らかな影響要因は出なかった。
- ・告知を受けている者、職業を持っている者は健康、心理精神の満足度が低かった。
- ・退院後1年未満の者、64歳以下の者は健康、社会経済、心理精神、家族の4領域において満足度が低かった。
- ・性別、症状の有無では健康、社会経済、心理精神、家族の4つの領域において、満足度の差はでなかった。

## VII. おわりに

今回の研究で影響要因を明確にすることはできなかったが、退院後の患者個々の思いを知ることができた。また、QOLについて考えていく中で、その概念の大きさをあらためて認識した。私達はこの研究を行って得られた新しい知識や視点を元に、患者の生活構造やライフスタイルを考えた援助を行っていきたい。

今回の研究を進めるにあたり、御協力下さいました対象者の皆様、金沢大学医学部保健学科教授 真田弘美先生、高知女子大学看護学研究科がん看護学専攻 南出ますみさん、第一外科諸先生方に感謝致します。

## 引用・参考文献

- 1) 赤池こずえ：ストーマ患者のQOL，消化器外科NURSING，秋季増刊，13 - 20，1998.
- 2) 真田弘美他：臍頭十二指腸切除術を受け退院した患者における生活の価値・満足度からみたクオリティ・オブ・ライフの検討，日本がん看護協会誌，8 (1)，35 - 41，1994.
- 3) 高見沢恵美子：人工肛門造設患者の生活の主観的評価に関連する因子の構造と影響要因，日本看護協会雑誌，15 (4)，1 - 8，1995.
- 4) 迫井正深：クオリティ・オブ・ライフ (QOL) 測定の質的評価，JAMA<日本語版>，12月号，101 - 104，1994.
- 5) 黒田裕子：クオリティ・オブ・ライフ (QOL) その概念的な側面，看護研究，25 (2)，99 - 105，1992.
- 6) 筒井真優美：看護学におけるQOLの概念と測定2つの看護婦の論文を通して，看護研究，25 (2)，153 - 155，1992.
- 7) 黒田裕子：クオリティ・オブ・ライフ (QOL) その測定方法のついて，看護研究，25 (3)，183 - 189，1992.